リーディングDXスクール事業 【実践事例】

札幌市立中央小学校（札幌市）【指定校】

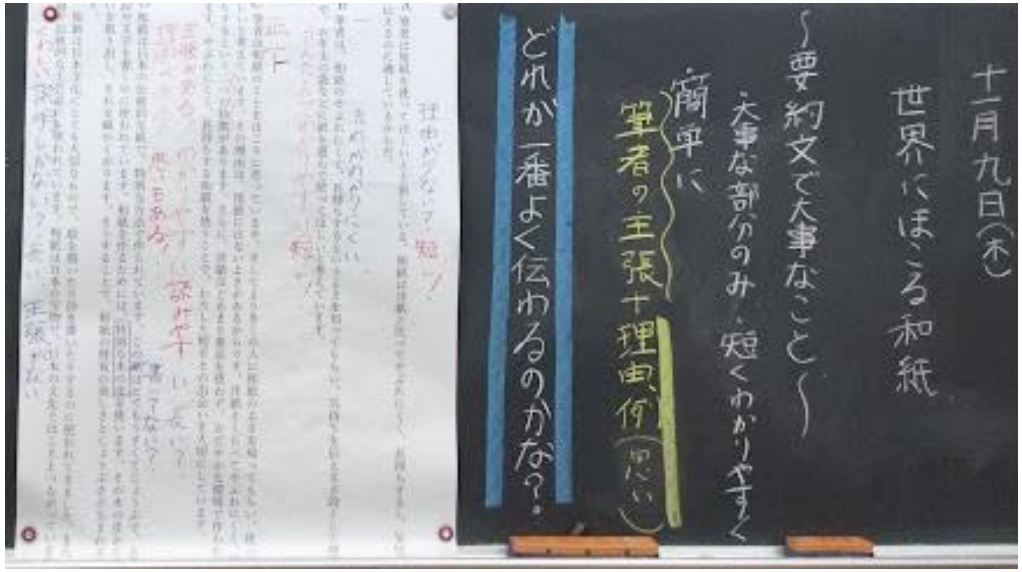
＜教育利用＞ ⑤「説明文の要約で生成AIの利用を考える」

４年生　国語「世界にほこる和紙」

「伝統工芸の魅力を調べ、３年生にも分かりやすいリーフレットを作る」という目的に向かって、双括型の説明文「世界にほこる和紙」の要旨を捉え、要約する活動を行う。

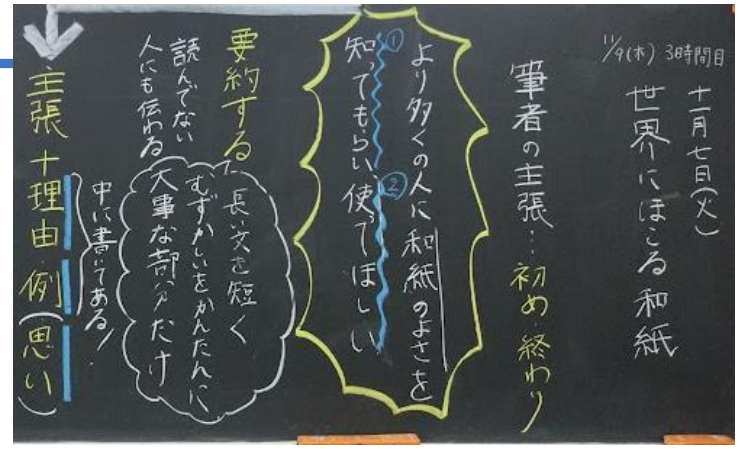
生成AIの採用理由

本実践では、要約するための手段の幅を広げるための使用を検討した。説明文の中心となる文や語を見つけた後、児童が要約するために考えた方法は、余分な言葉や表現を「削る」ことだった。要約文を自分達よりも下の学年に紹介する本実践では、難しい言葉を削るだけではなく「言い換える」という手段が必要だ。その手段を教師から提示するのではなく、児童に気づかせた方がよいと考えた。そこで、本文をプロンプトの一部に打ち込み、小学生に分かるように２００字以内で要約するように入力した。



実践より

今後生成AIは真新しいものではなく、誰もが活用していくことが考えられる。使う教師側も、AIの得意なこと、苦手なことを理解し、人の想像力を発揮する部分を児童と考えていくことが大切だと感じた。



本時の展開

前時までに、全員が本文の要約文をノートに書いて提出をしている。

本時では、児童の中から、

A（要旨は入っているが極端に短い例）
B（要旨とその理由が端的に述べられている例）
C（要旨とその理由が長文で丁寧に書きだされている例）を選出し、**D（ChatGPTの作成した文）**と一緒に４つ提示した。４つともこのクラスの誰かが書いた文だと前置きした後、それぞれのよさや改善点を話合った。Aでは短すぎて魅力が伝わらず、Cでは読み手が飽きてしまう。Bが短くわかりやすいという意見が多かった。Dは、本文に書いていないことが書かれており、詳しく知れるが、筆者の主張が弱く感じてしまうと言っていた。教師が「Dは実は友達の文ではなく、生成AIに作ってもらった文です。話題となった、本文に書かれていないことは、本文ではなんと書かれていたでしょうか。」と明かし、問うとAIが作った文に驚きながらも、要約では文を「削る」だけではなく、「言い換える」という方法もあることを知ったようだった。しかし、Dの要約文がいいと思う子は少なく、筆者の想いを伝えるには本文の言葉がいいと感じた子の方が多いようだった。